

風のように

甘木教会

主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一



災いだ、シオンに安住し／サマリアの山で安逸をむさぼる者らは。諸国民の頭である国に君臨し／イスラエルの家は彼らに従っている。
アモス6:1

アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。』 ルカによる福音書16:31

【説教要旨】

マルコによる福音書を基本として、マタイ、ルカ福音書が作られ、マタイ、ルカが生活している状況で、それぞれの福音記者の眼をもってイエスさまの生涯を語っています。ですから、マタイ、マルコ、ルカによる福音書を共観福音書と言い、今年はルカによる福音書が福音書の日課です。

ルカの置かれている状況で、そこで見るルカのイエスさまへの眼はどのようなものであったのでしょうか。

「貧しい者は幸いである。神の国はあなたがたのものである。……しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、あなたがたはもう慰めを受けている。」という平地でのイエスさまの説教があります。マタイは、「貧しい」を「心の貧しい一神に依り頼む」と精神化しているのに対して、「貧しい人は幸いである」と言っています。ルカの置かれた状況は、社会から置いていかれた多くの貧しい人がルカの周りにいたようです。イエスさまの誕生を天使から一番、最初に告げられたのは社会において差別されていた羊飼いであったりすることに代表されるように、登場人物が、その当時、差別されていた人でした。

ルカ福音書に書かれているイエスさまはこの譬は誰に語っておられるのでしょうか。当時、富んでいる人、つまり、神殿を中心として生きた貴族祭司、レビ人といわれる下級祭司、法の最高法院のメンバーの経済的に裕福な長老、とくにサドカイ派の人、都市の中小手工業者のラビ（律法学者）その律法学者の中のエリート、ファリサイ派の人々です。同時に社会から置いていかれた多くの貧しい人がイエスさまのこの譬を聞いていました。

貧しいラザロは天国で、金持ちは地獄で不幸になったという物語です。

祭司、サドカイ派の人、律法学者、ファリサイ派の人たちは言うのです。「私たちは律法に忠実で正しく生き、頑張ってきた。だから報いを得ている。」イエスさまはこう自負している彼らにこの譬を、それは同時に私たちにつきつけるのです。あなたがたは、現世で、富んでいるということだけで既に報いを受けている。地獄にいくと。

イエスさまの時代も貧しい人々は律法を守り、善をしようと思っても、律法を守り、善が行えない社会の仕組みがありました。この仕組みの外にいたこの乞食はファリサイ派、サドカイ派、律法学者、祭司にとって、もっとも神から遠いものです。しかし、この神から遠いと思われた現世で報いをいただいていた人が天国に行き、神に近いと自他ともに思っていた人が地獄にいく。

「アブラハムは言った。『もし、モーセと預言者に耳を傾けないなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、そのいうことを聞き入れはしないだろう。』、あなたがた富める者は、神の言葉に耳を傾けていないからだということです。いや、彼らは耳を傾けているという自信があったのですが、イエスさまは耳を傾けていないと言われる。

ルターが「真の義や聖と、偽善的な義や聖とを正しく区別するように注意深く努めるがよい。」というように、金持ちは、偽

善的な義や聖の中を生きているというのです。

あなたたちの傍に「その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。犬もやって来ては、そのできものをなめた。」という人がいるのに、彼らは律法を守らなかった結果だと見下し、乞食を蔑んでいた。それは、神は憐みの神、恵みの神であるというみ言葉に耳を傾けていないというのです。確かに真面目に律法を守り、彼は結果として富みを得たかもしれない。しかし、**偽善的な義や聖**であるというのです。

私たちが今、この譬から何を主から求められているかと言うことです。神のみ言葉に耳を傾け、自分が正しい、善をなすことが出来るという**偽善的な**ことを捨てることです。いかに自分たちが自分中心に生きているかということを深く、深く反省することです。悔い改めること、神がイエスさまを通して示された神は憐みの神、恵みの神であることに耳を傾けることです。

貧しいラザロは、現世にあって不幸のどん底にいました。当時では罪の結果でした。しかし、ここに大きなみ心が働かれます。ルターは、「この汚れが彼のうちにとどまり続けるので、彼はへりくだらせられ、キリストの恵みと祝福とはこのようにへりくだらせられる者に甘い。このように、こうした汚れや罪の残りは、信じる者にとって妨げではなく、大いに益となる。自分の弱さと罪を感じれば感じるほど、いよいよ恵みのみ座であるキリストに逃れ行き・・・」

と言っています。**理性とは違う眼、霊的な眼でキリストの国を見る**ことになるのです。

人間が肥大化し、神のように振舞う現代の富める社会にあって、自分を動かしている生き方は**偽善的な義や聖**であって、滅びにしかないので。なにより、人間を動かす**理性とは違う眼、霊的な眼**をもって、生きることこそ祝福の結果を導くことを伝えることです。キリストの国を見ることに日々、私たちはモーセと預言者（み言葉）に耳を傾ける者として歩み、み言葉を伝えていきましょう。

牧師室の小窓からのぞいてみると



1991 年は 546 万人の党员をかかえていた自民党が、2024 年には、102 万人となり、2025 年は、100 万人を割りましたとニュースがありました。

それは、自民党だけでなく今までの既成の政党などに魅力を感じられなくなったということもあるでしょうが、これも日本の人口減少の一つの証ではないかと思います。あれだけ強い自民党・安倍政権のときも下がっていました。キリスト教の信者数も 1992 年をピークに減っています。

政治も、経済も人口減少によって活力を失っていくことだと思います。

また 1990 年はバブル崩壊の時代で、経済の減少を示します。失われた 30 年とつながっていきます。

そのとき、私たちはこの社会の変化に気づきつつも、どうすればよいのかという具体的に手を付けられなかったのは、政治も、経済も、宗教界も同じだったのだと思う。

さて、どう今、向かい合うか。「主にあって堅く立ちなさい」という信仰の原点へ徹底的にもどる時代がはじまったと思います。組織でなく信仰に立つ時です。

園長・瞑想？迷走記



「A さんの勝手な行動は、今後どのように対応して良いか」と毎日の A さんとの生活を考えるときがあります。しかし、また、「勝手な行動」とは誰が決めたのかと思うと、こちらが決めたことで、きっと彼の気持ちがあるはずだと思います。決めつけてはいないかと自問自答しています。

「勝手、我が儘」という子どもは、秩序を乱す、しつけがなっていない、他の子どもに悪い影響を与えるという具合に決めつけていいのだろうか。ここが難しい。このことで私はいつも悩み、反省させられ、勇気が必要になる。

日毎の糧

聖書：ハレルヤ。わたしの魂よ、主を讃美せよ。

命ある限り、わたしは主を讃美し、長らえる限り、わたしの神にほめ歌をうたおう。 権力者に依り頼んではならない。 人間には救う力はない。 詩編 146：1－3



ルターの言葉から

神のわたしたちに語りかけることを信じることはもっとも大いなることで、もしわたしたちがこれを信じるなら、救われるだろう。

『卓上語録』M.ルター著、植田兼義訳、教文館

人間に頼らず

ここから 150 篇までハレルヤで詩がはじまる非常に整えられた詩編です。

権力ある者、また人間にも信頼していけないと呼びかけます。同じ表現が他の詩編にもあります。「118:8 人間に頼らず、主を避けどころとしよう。 118:9 君侯に頼らず、主を避けどころとしよう。」

現代社会は、遺伝子さえ操作をして、人の命を生み出す時代です。また、技術革新、発展は止まることがありません。人間の万能感は止まることが出来ず、神を必要としないところまできています。しかし、では、人は幸せになったかという、人間の自己中心が強くなり、自己と自己とのぶつかりあい、そして力あるものが、捻じ曲げて弱者を支配していく決して幸せでない不幸な社会が生まれています。人間の自己中心な欲は膨らみ世界はまさに滅びへと転がり落ちようとしています。

「人間には救う力はない。」と聖書は私たちにはっきりと伝えてきます。今こそ、永らえる限り、神に信頼してこそ、救われるのです。

祈り：人に信頼せず、あなたに委ねていく私たち一人一人にしてください。

コヘレトから



「見よ、私が幸せと見るのは、神から与えられた短い人生の日々、心地よく食べて飲み、また太陽の下でなされるすべての労苦に幸せを見出すことである。それこそが人の受ける分である。」

長く熱が続き、飲む気力も、食べる気力も起こらずにいてやっと、食べたいと思うようになったのは、つい最近である。その時、「天ぷらが食べたい」と思った。天ぷらといえば、豊田市の花火大会のとき、いつも私たちの家族を招待してくれ、天ぷらでもてなしてくれたあの天ぷらが食べたいと思った。あの天ぷらとは福本秀盛牧師の揚げてくれる天ぷらである。

先生からはしゃぶしゃぶの木曽路、明治屋のレストラン・・・初めての物ばかりで、食べることの楽しさをいただいた。その度にコヘレトの言葉を思い出す。

「人生は短いのです。限りがあるのです。けれども、限られているからこそ、束の間であるからこそ、意味があるのだと、コヘレトは逆説的に教えてくれます。飲み食いを賛美する言葉は、決して享楽主義から出たものではありません。そのことに気づけば、飲み食いというごく日常的な小さな幸せは『神の賜物』であり、至福の喜びだということが分かるでしょう。」（「それでも生きる 旧約聖書 『コヘレトの言葉』」 小友聡 NHK 出版）

(甘木日記)土)一日中、安静にしていたが、夕刻より久しぶりに熱が出てカコナールを飲む。日)家内の誕生日。感謝のカードと丹後ちりめんの帽子、鞆を家内が起きた時、渡した。教会でも誕生を祝ってくれた。お彼岸が近いので家内が絶品のおはぎを作ってくれてお彼岸を祝う?夜、高熱。月)幼稚園出勤、午後から大学病院。そして幼稚園。今日は涼しい。火)久留米教会・信徒会で幼稚園の運営について説明をする。久しぶりに熱っぽくない。水)保護者交流会。園庭で出来た紫蘇で、ジュースを作る。家内と大和牧師がリードしてくださる。木)休み、幼稚園と打ち合わせを済ませ、その後、家で療養する。金)幼稚園を休み。早朝から、主日の準備をする。この一週間も熱との遊び、仲良くなる日々。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
ぐちらない聖人（牧師）もいます。

土）礼拝に備えて一日中、安静にしていたが、夕刻より久しぶりに高熱。カコナールを飲むとさがる。明日の甘木の礼拝にいくのに自信がなく、信徒さんに迎えにきてくださるよう頼む。早く平熱に治まって欲しい。日）朝も帰りも信徒さんに送迎していただいた。本当に助かった。助かる。朝起きた時、家内に感謝のカードと丹後ちりめんの帽子、鞆を送る。感謝しても感謝しきれないが、ちょっとしたことで喧嘩になる。これいかに。礼拝、役員会を終えて帰宅。夕刻から 37.8 度の高熱。カコナールを飲んで寝る。段々と高熱に慣れてきている。月）来週の羽村幼稚園行の飛行機券をキャンセルしてもらおうと長男に 6 時半におくると、すぐに返信がくる。「今、園庭を掃除していたら、ごめん」。親子同じようなことをする。朝、コンビニ行くとフィリピンの方がお釣りの小銭を寄付箱に入れていた。カトリックの国だと感心。一方、その人が卒園児の保護者だと気が付かなかったことに老いのボケを感じた。昼から大学病院に検査と診察。さて、いったいこの熱はどこから出ているのだろうか。涼しくなり、3 バスストップを歩いて、バスに乗り幼稚園に帰る。火）アイスノンで冷やさず眠れて、起きてても 36.4 度で、久しぶりに熱っぽくなく朝を迎える。久留米教会・信徒会で幼稚園の運営について説明をする。家内は、後片付けの協力をしている。水）保護者、



交流会。園庭で出来た赤紫蘇、青紫蘇を使って、家内と大和牧師のリードで、保護者と紫蘇ジュースを作る。**（左が青紫蘇、右が赤紫蘇）** ➡
「園だより」の原稿を送り安堵。夜中に血圧も高く、高熱になり、#7119 と相談し、救急車で大学病院に行くが、「入院しますか、自宅に帰りますか。処置は変わらないと思います。」と言われ自宅へ。次の定期検査の時、主治医と決めようと思う。木）体調が相変わらず優れず、朝に電話で幼稚園と打ち合わせをして、その後、一週間、家で休養することにした。幼稚園は休むことにしたが、何かがあれば電話をするように指示。これの状態を越えれば長生きするだろうと思いつつ、もしものときを考え、息子に電話をし、人生の後始末をするために息子らに知ってもらい、家内は一人でも生きていけるだろうが、見守ってもらうために大阪から九州に早く来るように頼む。

金）「長崎物語」という歌に「赤い華なら曼殊沙華・・・」という歌があるが、外に出ないせいか今年は見ない。どこかで咲いているのだろうか。今週、長男に助けられた。

